

大学生のソーシャルスキルに対する出身階層と 学生生活の効果

塩 谷 芳 也

要 旨

本研究の課題は、出身階層と学生生活に着目しながら、大学生のソーシャルスキルの規定要因を解明することである。日本の大学生を対象に2014年にweb調査を行い、ソーシャルスキル(KiSS-18)と出身階層(親の学歴, 職業, 経済的な豊かさ等)および学生生活(アルバイト, サークル・部活動, 読書量等)を測定した(N=515)。ソーシャルスキルを従属変数, 出身階層と学生生活を独立変数とした重回帰分析を行なったところ, 性別, 年齢, 大学の偏差値, 大学の成績等の変数をコントロールした状態でも, 出身家庭の経済的な豊かさ, アルバイト, 読書量という3つの変数が有意な正の効果を示していた。これらの結果について, 因果の方向性を考慮しながら, 社会的不平等と大学生のソーシャルスキル改善という観点から議論した。

キーワード: ソーシャルスキル, 出身階層, アルバイト, 読書, 社会的不平等

1. ソーシャルスキルの規定要因を探る

本研究の課題は、大学生のソーシャルスキルの規定要因を解明することである。具体的には、親の学歴、職業、経済的な豊かさ等の出身階層に関する要因と、サークル活動、アルバイト、読書といった学生生活に関する要因がソーシャルスキルに及ぼす影響を明らかにする。ソーシャルスキルは、次のように定義される(菊池 1988: 菊池 2007)。

定義 ソーシャルスキルとは、対人関係を円滑にするための技能であり、相手から肯定的な反応をもらい否定的な反応を避けるための技能である。

ソーシャルスキルは、一般には「コミュニケーション能力」などと呼称され、21世紀の労働者に求められる能力として着目されている。たとえば、経済産業省が2006年から提唱している「社会人基礎力」においては、多様な人びとと協働する力が3大要素の1つに挙げられ、「発信力: 自分の意見を分かりやすく伝える力」、「傾聴力: 相手の意見を丁寧に聞く力」、「柔軟性: 意見の違いや立場の違いを理解する力」といったコミュニケーションの力によってチームワークがうまく機能するとされている(河合塾・経済産業省 2010)。さらに、日本経済団体連合会が会員企業を対象に実施している「新卒採用に関するアンケート調査」を見ると、採用選考時に重視する要素として「コミュニケーション能力」が15年連続で第1位となっており、

2017年度は82.0%の企業が重視すると回答している（日本経済団体連合会 2017）。

ソーシャルスキルへの関心は、学術的な文脈においても高まりつつある。たとえば、社会学においては、産業構造の転換に伴って労働者の選抜基準が変化しており、学力とは異なるコミュニケーション能力等の「ポスト近代型能力」が地位達成に及ぼす影響が強まっているという議論がある（本田 2005）。さらに、ソーシャルスキルが高い人びとほど、正社員である確率が高いこと（塩谷 2014）や、ソーシャルスキルが高い大学生ほど、就職活動において早期に内定を得る傾向があること（塩谷 2018）を示す実証的な研究もある。

しかし、ソーシャルスキルの規定要因に関する社会学的な研究は少ない。ソーシャルスキルは主として心理学分野で研究されてきたため、社会的要因との関係については十分に検討されてこなかった。一方、社会学においても、ソーシャルスキルのような心理特性に関心が払われることは少なく、地位達成に関する研究では、親の学歴や職業といった客観変数が主な分析対象となってきた。ソーシャルスキルに対する社会的要因の影響は、心理学と社会学という両分野の境界に位置する問題関心であり、産業構造の転換に伴って着目されつつある新たな研究課題である。

ソーシャルスキルの規定要因に関する社会学的研究の例としては、本田（2005）が挙げられる。この研究では、家庭環境の重要性が指摘され、その効果について分析が行われた。しかし、そこで使用されたソーシャルスキルの測定法は、本田独自のものであり、測定の妥当性と信頼性が確認された尺度ではなかった。具体的には、「自分の意見を人に説明する」、「よく知らない人と自然に会話できる」という2項目に対する3段階の自己評価の平均値がソーシャルスキルの指標とされており、測定の適切さについて疑問の余地がある。

さらに、出身家庭の階層要因としては、親の職業と経済的な豊かさに関する分析が行われ、後者に関する正の効果が示されているものの、親の学歴という重要な変数が含まれていなかった。したがって、ソーシャルスキルに対する経済的な豊かさの効果は、学歴による疑似相関である可能性がある。

そこで本研究では、本田（2005）の問題を克服し、より精緻な測定を行うため、妥当性と信頼性が確認されたソーシャルスキルの尺度を使用する。加えて、出身階層については、職業と経済的な豊かさのみならず、学歴も含めて、その影響を統制した分析を行う。

さらに本研究では、大学生の生活がソーシャルスキルに及ぼす影響についても分析する。これにより、学生生活の過ごし方によって、ソーシャルスキルを高められるかどうかを検討する。出身階層という制御不能な要因と同時に、コントロール可能な生活要因に着目することで、ソーシャルスキルに関する格差と不平等の一端を明らかにしつつ、大学生のソーシャルスキルを改善する方法を探ることが本研究の目的である。

2. 方法

(1) 調査対象者

日本全国に居住する大学3年生のうち、企業への就職を予定している人びとを対象に、ウェブ調査（委託先は（株）マクロミル）を用いて就職活動の前後でパネル調査を実施した。第1波調査を2014年1月14日から23日に実施し、1648名（男子458名、女子1190名）から回答を得た。さらに、第1波調査の回答者を対象に2014年12月19日から24日に第2波調査を行い、515名（男子150名、女子365名）から回答を得た。

この調査の元々の目的は、大卒労働市場での選抜に対するソーシャルスキルの因果効果を解明することであった（塩谷 2018）。パネル調査が実施されているのは、このためである。ただし、この調査では、本研究の問題関心に合致する変数が適切に測定されているため、この調査データを分析する。

(2) 調査内容

第1波調査では、ソーシャルスキル、性別（男子ダミーとして分析に使用。以下同様）、年齢に加えて、大学の特徴に関する変数として、大学の偏差値、国公立と私立の区別（国公立ダミー）、文系と理系の区別（理系ダミー）を測定した。さらに、学生生活に関する変数として、実家に住んでいるか否か（実家ダミー）、寮生活の経験があるか否か（寮ダミー）、大学での成績（Aや優の比率）、サークルや部活動の経験の有無（サークルダミー）、アルバイト経験の有無（アルバイトダミー）、1ヶ月に読む本の数を測定した。

第2波調査では、出身階層に関する変数として、父学歴（父大卒ダミー）、母学歴（母大卒ダミー）、父雇用形態（自営ダミー、非正規等ダミー、基準：正規）、父職（専門ダミー、管理ダミー、事務販売ダミー、基準：マニュアル等）、15歳時くらいむきを測定した。

ソーシャルスキルの測定ではKiSS-18（菊池 1988：菊池 2007）を使用した。これは18の質問項目（表1）から構成される尺度であり、合計得点がソーシャルスキルの指標とされる。「次のことは、あなた自身にどれくらいあてはまりますか」という質問文に続いて各項目をランダムマイズして提示し、「いつもそうだ」（5点）から「いつもそうでない」（1点）までの5件法で回答してもらった。KiSS-18は妥当性と信頼性が確かめられている尺度であり（菊池 2007）、社会心理学の分野で定評のある尺度として使用されている。

大学の特徴に関する変数の測定について説明する。「あなたの大学の種類をお知らせください」という教示文に続いて、「私立大学（偏差値45未満）」、「私立大学（偏差値45-49）」～「私立大学（偏差値65以上）」、「国公立大学（偏差値45未満）」、「国公立大学（偏差値45-49）」～「国公立大学（偏差値65以上）」という12の回答カテゴリの中から1つ選んでもらった。ここから国公立ダミー（基準：私立）と偏差値という2つの変数を作成した。偏差値は各回答カテ

ゴリの中央の値とした。

文系／理系の区別については「あなたは文系ですか。理系ですか。(文系なら1, 理系なら2, 文理融合なら3, その他なら4を記入)」と質問し、数値を入力してもらった。文系, 文理融合, その他を合併して文系とし、理系ダミー(基準: 文系)を作成した。

学生生活の特徴に関する変数の測定について説明する。実家居住については「現在、あなたは実家で親と一緒に暮らしていますか(一緒に暮らしている場合は1を, そうでない場合は0を記入)」と質問し、数値を入力してもらった。実家居住ダミー(基準: その他)を作成した。

寮経験については、「あなたは、学生寮で暮らした経験がありますか(経験がある場合は1を, そうではない場合は0を記入)」と質問し、数値を入力してもらった。寮経験ありダミー(基準: なし)を作成した。

大学の成績については、「大学で履修した授業のうち『優』や『A』(最も高い評価)をもらった授業は何パーセントありますか」と質問し、数値を入力してもらった。分析ではその数値を使用した。

サークル経験については、「これまでに(大学で)所属してきたサークルや部活の数(合計)をお知らせください(半年以上, 実質的に参加してきたもの)」と質問し、数値を入力してもらった。サークル経験ありダミー(基準: なし)を作成した。

アルバイト経験については、「これまでに経験してきたアルバイトの数(合計)をお知らせください(3ヶ月以上継続したもの)」と質問し、数値を入力してもらった。アルバイト経験ありダミー(基準: なし)を作成した。

読書量については、「1ヶ月に読む本の数をお知らせください(漫画・雑誌は除く)」と質問し、数値を入力してもらった。0-25までの連続量として扱った。

出身階層に関する変数の測定について説明する。父学歴と母学歴については「あなたが15歳(中学3年生)のときの, ご両親の学歴をお知らせください」という教示文に続いて「父親の学歴」と「母親の学歴」のそれぞれについて「中卒」, 「高卒」, 「専門学校卒(高校を卒業していない)」, 「専門学校卒(高校を卒業している)」, 「高専卒」, 「短大卒」, 「大卒」, 「大学院卒」, 「父親はいなかった」(父についてのみ提示), 「母親はいなかった」(母についてのみ提示)という回答カテゴリの中から該当するものを選択してもらった。短大以上を「大卒」, それ未満を「非大卒」として大卒ダミー(基準: 非大卒)を作成した。父不在や母不在は非大卒とした。

父雇用形態については、15歳時に父不在でない場合に測定した。「あなたが15歳(中学3年生)のときの, ご両親の雇用形態をお知らせください(ひとつだけ)」, 「父親の雇用形態」という教示文に続いて、「自営業・自由業」, 「正社員(常時雇用の一般従業員・企業の経営者・役員・管理職を含む)」, 「臨時雇用」, 「パート」, 「アルバイト」, 「派遣社員」, 「契約社員・嘱託」, 「内職」, 「無職」という9つの回答カテゴリの中から1つ選んでもらった。ここから自営ダミー, 非正規ダミー(基準: 正規)を作成した。非正規ダミーには、「臨時雇用」から「内職」まで

の幅広い非正規雇用の他、無職や父不在も含まれている。

父職は15歳時に父がおり、無職でない場合に測定した。「あなたが15歳（中学3年生）のときの、ご両親のお仕事をお知らせください（ひとつだけ）」、「父親の仕事」という教示文に続いて「専門的な仕事（教員・医師・看護師・法律家・システムエンジニアなど）」、「部下の管理する仕事（課長以上の管理職・議員・局長など）」、「事務的な仕事（一般事務・会計・経理事務など）」、「販売・サービス系の仕事（商店の店員・飲食店員・販売外交員など）」、「技能・作業系の仕事（工場労働者・職人・理美容師・建設作業員・運転手など）」、「農林漁業」という6つの回答カテゴリの中から最も近いものを1つ選んでもらった。専門ダミー、管理ダミー、事務販売ダミー（基準：マニュアル等）を作成した。基準カテゴリのマニュアル等には、無職や父不在も含まれている。

15歳時くらしむきについては「あなたが15歳（中学3年生）のころの、あなたのお宅の暮らし向きはいかがでしたか。当時の普通の暮らし向きと比較してお知らせください」と質問し、「豊か」（5点）、「やや豊か」（4点）、「ふつう」（3点）、「やや貧しい」（2点）、「貧しい」（1点）の5件法で回答してもらった。この変数は、出身家庭の経済的な豊かさを間接的に測定する項目として、格差と不平等に関する日本の社会学的研究で使用されている。

これらの変数を分析に含めた理由は次の通りである。ソーシャルスキルが対人相互作用に関する技能であることを踏まえると、現実の生活における他者との接触のあり方がソーシャルスキルに影響している可能性がある。

サークルや部活をしていると、集団の一員として他の学生と日常的に交流するため、ソーシャルスキルが高まるかもしれない。アルバイトの場合は、組織の従業員としての責任を負いながら、学生だけではなく多様な他者と接触することになる。そのため、アルバイト経験はソーシャルスキルに対してサークルや部活とは異なる影響を及ぼす可能性がある。

寮生活においては、サークルや部活と同様に大学生どうしで相互作用を行うが、生活空間を共有する点が大きく異なっている。サークルや部活が区切られた時間における一時的な交流であることに対して、寮生活では自分が望まないタイミングであっても他者との接触が避けられないことがある。その意味で、寮生活にはある種のストレスがあると考えられるが、そのようなストレス状況に対処することがソーシャルスキルを高めるかもしれない。

実家居住も大学生の対人接触のあり方に影響すると考えられる。1人暮らしをしていれば、時間を気にせず自宅に友人を招いて交流できる等、他者との接触頻度が増えるかもしれない。実家居住の影響については、一概には議論しづらい部分もあるが、探索的な意図も含めて分析に取り入れた。

読書についても、ソーシャルスキルへの影響を考慮して分析に含めた。読書習慣を持つことで、相手の言語的メッセージの理解や言語による自己表現が巧みになり、ソーシャルスキルが高まる可能性がある。あるいは、小説のような本を読むことで、多様な対人状況を間接的、想

像的に体験することを通して、ソーシャルスキルが高まるかもしれない。

先行研究では、中学3年時の成績がソーシャルスキルに正の効果を持つことが知られている(本田 2005)。そこで、大学の偏差値と大学での成績を、学力と関連するような知的能力の代替指標として使用した。性別、年齢、大学種別(国公立/私立)、文理の区別については、基本的な統制変数として分析に含めた。

出身階層については、父学歴、母学歴、父雇用形態、父職業、15歳時くらしむきを使用した。学歴、職業、収入の3つが社会階層の代表的な指標である。学歴については、最終学歴取得後は、値が変化しないことが日本では一般的であり、測定も容易であるため、両親のものを分析に含めた。職業については、伝統的な社会階層論の方法に従って父職業を使用した。仕事の内容としての職業だけでなく、正規、非正規、自営といった雇用形態も測定した。また、出身家庭の世帯収入を回答するのは実質的に不可能であるため、15歳時くらしむきを代替指標として使用した。

3. 結果

(1) 記述統計

ソーシャルスキルの測定尺度である KiSS-18 について因子分析を行った(表1)。固有値は第1因子から第2因子にかけて大幅に減少していた。第1因子の因子負荷量は、すべての質問項目に対して大きな値を示していた。さらに、信頼性係数は0.9以上であった。そこで、ソーシャルスキルの指標として18項目の合計得点を使用した。

分析に使用する変数の記述統計は表2の通りである。読書量については、当初は40という最大値が存在した。しかし、相関係数が大きめに算出されることを防ぐため、この値を外れ値とみなし、25という2番目に大きな値に変換して分析した。

(2) ソーシャルスキルに対する出身階層と学生生活の効果

ソーシャルスキルに対する出身階層と学生生活の効果を調べるため、ソーシャルスキルを従属変数、その他の変数を独立変数とした重回帰分析を行った(表3)。

統計的検定の基準を5%として結果を読み取る。大学の特徴に関する変数では、大学の偏差値と理系ダミーが有意な効果を示した。偏差値が高い大学に通う学生ほど、ソーシャルスキルが高い傾向があり、偏差値が1高まると、ソーシャルスキル得点は0.327高まるという関係が見られた。さらに、理系は文系に較べて、ソーシャルスキル得点が3.335高かった。

学生生活に関する変数については、アルバイト経験と読書量が有意な効果を示した。アルバイトをしたことがある学生は、そうではない学生に較べて、ソーシャルスキル得点が5.468高かった。読書量については、数多くの本を読む学生ほど、ソーシャルスキルが高い傾向があっ

表 1 KiSS-18の因子分析

	第1因子
1 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか	.684
2 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか	.625
3 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	.663
4 他人が話しているところに、気軽に参加できますか	.637
5 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	.649
6 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか	.492
7 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	.551
8 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	.715
9 こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	.643
10 他人を助けることを、上手にやれますか	.709
11 気まづいことがあった相手と、上手に和解できますか	.632
12 まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	.790
13 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	.695
14 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか	.708
15 まわりの人たちが自分とはちがった考えを持っていても、うまくやっていけますか	.610
16 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか	.672
17 仕事の上で、どこに問題があるのかすぐにみつけることができますか	.629
18 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか	.558
	固有値 (第1因子) 7.635
	固有値 (第2因子) .699
	分散説明率 (第1因子) .906
	α .927
	ケース数 515

(注) 主因子法, 回転なし。

た。1ヶ月あたりの読書数が1冊増えるごとに、ソーシャルスキル得点が0.470高まるという関係が見られた。実家や寮といった住環境に関する変数は、有意な効果を持たなかった。サークル・部活動については、ソーシャルスキルと正相関していたが、有意ではなかった。

出身階層に関する変数については、親の学歴や職業は有意な効果を持たず、経済的な豊かさの指標である15歳時ぐらしむきだけが有意な正の効果を示した。経済的に豊かな家庭に育った学生ほど、ソーシャルスキルが高い傾向があった。15歳時ぐらしむきが1段階、高まると、ソーシャルスキル得点が2.088高まるという関係が見られた。

表2 記述統計

	度数	比率	平均	標準偏差	最小値	最大値
ソーシャルスキル			56.9	12.3	18	89
男性	150	29.1				
年齢			20.9	0.6	20	22
偏差値			53.6	6.4	44	65
国公立	119	23.1				
理系	132	25.6				
実家	328	63.7				
寮	43	8.4				
成績			49.5	25.9	0	98
サークル	259	50.3				
アルバイト	452	87.8				
読書量			2.0	3.3	0	25
父大卒	276	53.6				
母大卒	231	44.9				
父自営	75	14.6				
父正規（基準）	408	79.2				
父非正規等	32	6.2				
父専門	120	23.3				
父管理	175	34.0				
父事務販売	89	17.3				
父マニュアル等（基準）	131	25.4				
15歳時くらしむき			3.3	0.8	1	5
全体	515					

4. 考察

本研究の課題は、出身階層と学生生活に着目しながら、大学生のソーシャルスキルの規定要因を解明することであった。分析の結果、出身階層については、経済的な豊かさがソーシャルスキルを高める効果を持つことが明らかになった。これは先行研究と整合的な結果である。本研究では、ソーシャルスキルの測定や学歴のコントロールについて、本田（2005）の問題を克服するような調査と分析を行ったが、得られた結果は同様であった。すなわち、本研究の遂行により、出身家庭の経済的な豊かさがソーシャルスキルを高めるという結果の頑健性が高められたと言える。

表3 ソーシャルスキルの重回帰分析（偏回帰係数）

	係数	標準誤差
男性	.032	1.194
年齢	-1.237	.934
偏差値	.327 ***	.090
国公立	-2.416 †	1.400
理系	3.335 **	1.278
実家	-.477	1.188
寮	3.098	1.951
成績	.037 †	.021
サークル	1.988 †	1.087
アルバイト	5.468 **	1.633
読書量	.470 **	.168
父大卒	.031	1.226
母大卒	-.382	1.145
父自営	1.032	1.538
父正規（基準）		
父非正規等	1.072	2.361
父専門	.031	1.614
父管理	1.086	1.583
父事務販売	.767	1.715
父マニュアル等（基準）		
15歳時くらしむき	2.088 **	.662
切片	48.658 *	19.565
R ²	.122 ***	
ケース数	515	

† $p < 0.10$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

それでは、なぜ出身家庭の経済的な豊かさがソーシャルスキルに影響するのだろうか。この理由については、本田（2005）は考察を行っていないが、メカニズムの1つとして次のような可能性が考えられる。経済的に豊かな家庭では、子どもに対して、習いごとのような学校とは異なる場において、他者と触れ合う機会を提供している可能性がある。出身家庭の経済的な豊かさは、このような異質な他者との触れ合いの頻度を通して、子どものソーシャルスキルに影響しているのかもしれない。

詳細なメカニズムは不明であるが、出身家庭の経済的な豊かさがソーシャルスキルに影響することを本研究がより精緻に実証したことは、格差と不平等の観点からは重要である。先行研究の中には、ソーシャルスキルが労働市場における選抜に影響することを示すものもある（塩谷 2014, 2018）。これらの知見を踏まえて本研究を振り返るならば、出身家庭の経済的な豊かさという個人には制御できない要因が、ソーシャルスキルの高低を通して、将来の職業達成における格差を生み出している可能性がある。

それでは、個人が自らの意志で変更できる要因の中で、ソーシャルスキルに影響するものは何だろうか。本研究では、このような問題意識に基づいて、大学生の生活要因も分析に取り入れた。そこでは、アルバイトと読書がソーシャルスキルに対して正の効果を持つことが示された。

アルバイトとソーシャルスキルの関係については、因果の方向が異なる2つの解釈が可能である。1つは、アルバイトの経験を通してソーシャルスキルが高まったというものである。アルバイトでは、組織の一員としての責任を負いながら、同僚、上司、顧客といった多様な人びとと相互作用する。このような経験が訓練となり、ソーシャルスキルが高まるという解釈が可能である。

これについては、サークルや部活動がソーシャルスキルを高める効果を持たなかったことが参考になるかもしれない。サークルや部活動は、大学生どうしで行われることが一般的であり、年齢をはじめとした同質的な集団の中で相互作用が行われる。これに対して、アルバイトでは、年齢や学歴の異なる多様な人びとのあいだでコミュニケーションが行われるため、要求されるソーシャルスキルのレベルが高くなり、訓練の効果が大きい可能性がある。

もう1つの解釈は、ソーシャルスキルの高い学生がアルバイトをするという逆の因果に関するものである。ソーシャルスキルが低い学生は、対人的な交流が必要とされるアルバイトのような機会を避けるかもしれない。あるいは、アルバイトとして働くことを希望したとしても、ソーシャルスキルが低いために、雇用を拒否される可能性もある（塩谷 2018）。

したがって、本研究の結果からは、いずれのメカニズムが妥当であるのか、因果関係の判断はできない。前者のメカニズムが成立しているなら、「ソーシャルスキルを高めるためには、アルバイトをすればよい」といったアドバイスが可能になるが、そのように主張するためには、厳密にはランダム割付に基づいた実験研究を行う必要がある。

読書とソーシャルスキルの関係については、ソーシャルスキルが高いことが原因となって、読書量が高まるとは考えにくい。したがって、「読書 → ソーシャルスキル」という因果の方向が想定できるが、これについては、第3変数による疑似相関の可能性を考慮する必要がある。たとえば、言語に関する能力のような、何らかの知的能力が読書とソーシャルスキルの双方に影響している可能性がある。言語的能力が高いために読書を好み、同時にソーシャルスキルが高くなるというのは、十分にあり得るメカニズムである。

本研究では、このような知的能力は測定していないが、大学の偏差値と成績という2つの変数は分析に含めている。これらの変数によって、上記のような知的能力を間接的に統制していると仮定的に考えるならば、読書の効果について、読書がソーシャルスキルを高めた可能性がある」と議論できるかもしれない。

その場合の解釈としては、読書によって語彙が豊富になり、言語的なインプットとアウトプットの両者が向上するため、総合的なソーシャルスキルが高くなるという解釈があり得る。あるいは、小説のような本を読むことを通して、自分の経験を超えた多様な対人状況を想像的に体験することが、現実の対人状況における振る舞いを学習する機会になっているため、ソーシャルスキルが高くなる、という解釈もできるだろう。

第3変数の問題が残るため、本研究の結果から、「読書がソーシャルスキルを高める」と断定することはできないが、大学生に向けて何らかのアドバイスをするならば、逆の因果の可能性が高いアルバイトよりも、読書の効果を指摘するほうがよいだろう。ソーシャルスキルは、経済的な豊かさという出身階層の影響を受けるけれども、読書を通して、自分の意志で改善できる可能性がある。

読書の効果に加えて、高偏差値大学に通う学生ほどソーシャルスキルが高かったという結果は、ソーシャルスキルがやはり何らかの知的能力と関連することを示唆している。大学の入試形態は多様化しているため、偏差値を知的能力の指標とすることには慎重な判断が必要である。ただし、本田（2005）においても中学3年時の成績が高いほど、ソーシャルスキルが高いことが示されている。これらの結果を踏まえると、ソーシャルスキルは、学力のような知的能力から独立したスキルではなく、むしろ何らかの知的能力がソーシャルスキルの基盤となっている可能性がある。

大学の特徴の中では、文理の区別もソーシャルスキルに対して有意な効果を持っていた。ただし、理系のほうが文系よりもソーシャルスキルが高かったことについては、解釈が困難であり、現時点では適切な仮説を提示できない。他の調査研究でも同様の結果が得られるかどうか、研究の積み重ねによって結果の頑健性を確認する必要があるだろう。

最後に、本研究全体の限界として、高回収率のランダム・サンプリング調査ではなく、ウェブ調査に依拠していることを挙げておく。そのため、厳密には統計的検定を通した結果の一般化はできない。したがって、本研究の知見が日本の大学生全体に当てはまると即断してはならない。全体的な傾向については、関連する研究蓄積から総合的に判断することが望ましい。本研究は、そのような研究の1つとして理解されるべきである。

[謝辞]

本研究はJSPS特別研究員奨励費（課題番号242020）の助成を受けた。

参考文献

- 河合塾・経済産業省, 2010, 『社会人基礎力 育成の手引き』朝日新聞出版社。
- 菊池章夫, 1988, 『思いやりを科学する』川島書店。
- 菊池章夫, 2007, 『社会的スキルを測る: KiSS-18 ハンドブック』川島書店。
- 塩谷芳也, 2014, 「若年男性の雇用形態とソーシャルスキル」『理論と方法』29(1): 191-206.
- 日本経済団体連合会, 2017, 「2017年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」, (2018年8月16日取得,
<http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf>)。
- 塩谷芳也, 2018, 「大学生の就職活動における内定取得時期に対するソーシャルスキルの効果: 男女差に注目して」『理論と方法』(印刷中)。
- 本田由紀, 2005, 『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版。

The effects of social class, part-time job, and reading books on social skills among Japanese university students

Yoshiya SHIOTANI

Abstract

The purpose of this study is to examine determinants of social skills among Japanese university students focusing on their social class and campus life. An Internet survey was conducted for Japanese university students (N=515) in 2014 to measure social skills (KiSS-18), social class factors such as parents' education, employment status, occupation, and household income, and campus life factors such as part-time job, circle activity, and reading books. The result of multiple regression analysis showed parents' household income, part-time job, and reading books have positive effects on the level of social skills although other variables such as sex, age, university scholastic level, and university grade were controlled. These results were discussed in terms of social inequality and implication for training of students' social skills considering directions of causalities.

Keywords: social skills, social class, part-time job, reading books, social inequality